

「んむ……ふむううう……」

途端に、義妹がトロンとした表情を見せた。

「んっ、んっ……むぐ、んぐ……レロ、レロ……シロロ」

詩織は一物を刺激することに夢中になり、少年に快感を送りこんできた。そうすることで自分も気持ちよくなれるのだから、行為にもいちだんと熱がこもる。

制服姿の義妹が、男の象徴に奉仕をしている。さらに、あまりよく見えないとはいえ、薫が少女の股間に顔を埋めて愛撫している。

それらを目にしているだけで、真斗の興奮はますます高まってきた。腰にこみあげてきた熱が一物の先端まで来て、いよいよ限界の訪れを告げようとしている。

「詩織、出すぞ！ 精液を飲むと、おまえもイッてしまう！ くううっ！」

かろうじて新たな暗示を与えると、真斗は少女の口内で精を発射した。

「んんんんっ！ んむうううううううううううう！」

くぐもった声をあげた詩織が、身体を強^{こわ}ばらせる。しかし、口を離そうとはしない。「レロレロ……んああああああああああつ！」

義妹の絶頂に合わせて、薫も悲鳴をあげて身体を痙攣^{けいれん}させた。どうやら詩織がイッたのを悟って、彼女もエクスタシーに達したらしい。

「んんん……んくっ、んくっ……」



苦しそうに顔をゆがめながらも、詩織は喉を鳴らして精液を呑み干していく。

真斗は、義妹の口にスperlマを出したことに、薫のときとは違う興奮を覚えていた。そのせいか、精の放出がなかなかとまらない。

しかし、いくら長くても射精には必ず終わりが訪れる。

「ぷはああああ……お兄ちゃん、すごくいっぱい……はあ、はあ……とっても濃いのお」

すべてのスperlマを呑み終えると、詩織がとろけるような顔で口を開いた。

「はあ、はあ……よいしょっ。しおちのオマ×コ、すっごく濡れてるよ。ボク、お口がグシヨグシヨ」

なるほど、義妹のスカートから這いでた薫の顔は、確かに愛液でグッシヨリ濡れている。おそらく、潮噴きでもしたのだろう。

真斗も、背徳感と心地よさに支配されて、半ば放心状態になっていた。

「せんばあい。ボク、もう我慢できない」

薫がフラフラしながら立ちあがって、ショーツを脱ぎ捨てた。そして、コンクリートの床に四つん這いになってスカートをめくりあげ、可愛らしいヒップを少年の前に曝けだす。秘裂にはたっぷりと蜜がしたためられて、ヌラヌラと光っている。

「先輩のチン×ン、ボクのオマ×コに欲しいのお。早く挿れてえ」

ボーイッシュな少女が、妖しく腰を振って誘惑してきた。

そんな姿を見ていると、射精で一時的に衰えかけた興奮がすぐに回復しはじめる。

「お兄ちゃん、わたしも……こっちのお口にも、オチン×ン挿れてほしいのお」

少年の昂^{たかぶ}りに気づいたのか、スペルマを呑んだばかりの詩織も顔をあげた。そして、グッシヨリ濡れた下着を脱ぎ捨て、よろめきながら薫の横で四つん這いになって自らスカートをめくりあげる。

（ゴクッ。スゲーや、これ）

あらわになった二人のヒップを見つめて、真斗は生唾を呑みこんだ。

少女たちのかすかにヒクつく秘裂からは、いずれも負けず劣らず大量の愛液が垂れて、太腿にまで淫らな筋を作っている。その姿を見ているだけで、勃起が最大限まで回復してしまう。

「ねえ。先輩、早くしてよお」

「あんつ、わたしが先だってばあ」

そう言っ、薫と詩織が競うように腰を振る。

ボーイッシュな少女には、義妹と仲よくするよう暗示をかけているが、こればかりは友情と別物らしい。

ただ、ヴァギナの状態から見て、どちらかを待たせておくのは難しそうだ。

（こりや、交互にするしかないか……あつ、そうだ。あれを試してみよう）
以前から、一度やってみたかったことを思いついて、真斗は口もとがほころぶのを抑えられなかった。

ヒュプノシスのような能力がなければ、また二人から思いを寄せられなければできないことなので、叶わない夢だとずっと思ってきた。だが、今ならそれを果たすことができる。

もつとも、普段ならたとえできるとしても、本当に実行しようは思わなかったに違いない。しかし、どうも今は昂たかぶると理性のタガがすぐにはずれてしまう。

「じゃあ、二人とも俺の目を見るんだ」

少女たちが反射的に見つめてくると同時に、真斗は自分の目に意識を集中させた。たちまち、二人の少女の瞳がうつろになった。これで、ヒュプノシスにかかったことがわかる。

「詩織、薫ちゃん。キミたちは、これからお互いの感覚を自分のものとして感じられるようになる。だから、俺が薫ちゃんのオマ×コにチ×ポを入れてみると、詩織も俺の動きを膣内で感じられるようになるんだ。薫ちゃんも、俺が詩織に入れているときは、自分の膣にチ×ポが入って動いているように感じられる」

と暗示を与え終えると、真斗は指を鳴らした。

「えっ？ あ……先輩？」

「お兄ちゃん？ 今、いったいなにを？」

我にかえった二人が、同時に目を丸くする。どんな暗示を与えられたのか、彼女たちは記憶にないのだ。

「それじゃあ、詩織には口に出してあげたことだし、まず薫ちゃんから挿れてやるよ」
真斗は、あえて少女たちの疑問を無視して口を開いた。

「ああ、嬉しい。早く挿れてえ。ボク、もう我慢できないの」

少年の言葉に、薫が本当に嬉しそうに腰をくねらせる。

「お兄ちゃん……わたしにも……」

対照的に、詩織がなんとも切なそうな表情を見せる。

「わかってるって。ちゃんと、代わりばんこにしてやる。それに、お楽しみもあるから……なっ」

と、シヨートヘアの少女のウエストをつかみ、真斗は淫裂にペニスを一気に埋めた。
「あああああああんっ！ 先輩が入ってきたあ！」

薫が悦びに満ちた声をあげて、少年を受け入れる。

一物がぬめったきつめの膣壁に包まれていく感触が、なんとも言えず心地いい。

「ああ。薫さん、羨まし……えっ？ あふうううん！ な、なに、これえ？ ああ

あ……なにか……オチン×ンみたいなの、入ってくるうう！」

嫉妬しつとの言葉を吐こうとした詩織が、戸惑いながらも気持ちよさそうな声をあげた。どうやら、ペニスが薫のなかに入ったのを見て、自分も挿入感を味わっているらしい。

(よしよし。成功みたいだな)

義妹の反応に満足しつつ、真斗はピストン運動をはじめた。

「あんっ、あんっ、あんっ、先輩っ！ はああんっ、とってもいいよお！」

「ああっ、ああっ、お兄ちゃん！ なんだか、きやううんっ、透明人間に、あんっ、犯されてるみたいいい！」

薫を突くたびに、隣の少女も同じタイミングで身体を揺すり、喘ぎ声をあげる。

「よし。じゃあ、次は詩織の番だぞ」

名残惜しなごりそうにまとわりついてくる花卉から一物を抜くと、かきだされた蜜がコンクリートに飛び散る。

それにかまわず、少年は濡れそぼった肉棒を詩織の秘唇に押し当てた。

「ふあああんっ！ お兄ちゃんのオチン×ン、当たってるのお！」

「しおっ……えっ？ きゃふうん。ボクのアそこにも、なにかが……あはああああん！」

真斗が義妹に分身を侵入させるのと同時に、ショートヘアの少女も悲鳴のような声

をあげて大きく背を反らす。

「あつ、ああつ……お兄ちゃんの熱くて硬いの……あつ、あつ、あんつ、入って……あんつ、くううつ！ 来たあああん！」

挿入前からすっかりできあがつていた詩織は、少年がピストン運動をはじめるなり甘い声をあげた。

「はっ、あううんっ！ ぼ、ボクにも、ああんっ、チンメンが、きゃふうんっ、入ってくるう！ あんっ、あんっ、なんで？ ひやううんっ、動いてるよお！」

薫も、あるはずのないシャフトの感触を味わい、戸惑いながらも快感に喘ぐ。

（スゲー。こりゃ、なんだか面白いや）

自分でかけた暗示だが、真斗は予想以上の効果に内心で舌を巻いていた。一物を交互に入れながら、まったく同時に二人を感じさせるのは、まさに一石二鳥と言える。

ヒュプノシスがなければ、絶対にできなかったであろう夢のシチュエーションに、興奮を抑えられない。

さらに、二人の美少女と昼休みに学校の屋上でセックスをしているという状況が、少年の昂^{たかぶ}りに追い打ちをかけていた。しかも、詩織の張った結界のおかげで誰も来る心配がない以上、時間の許す限りこの背徳感に満ちた行為を堪能^{たんのう}できる。

真斗は本能の赴くままに、少女たちを交互に突きつづけた。